

(3) 体験学習プログラムを効果的に展開するため構造的な条件が満たされている

体験学習プログラムを、より効果的なものとするために以下に挙げるような構造的な条件が満たされていることが望ましい。本コースは、これらを前提条件として開発されており、かなり恵まれた状況といえる。

①クラスの所要時間を3時間とする：これは前述した体験学習プログラムを余裕をもって十分に展開するために必要と考えられる時間である。もちろん体験学習の性質上、所要時間が1時間、あるいは30分であってもそれはそれとして学びの設定は可能ではあるが、演習の時間に対して2倍から3倍程度の時間をふりかえりやわかちあいにかける（結果的にかかることが大半であるが）ことが必要とされることを考えると3時間という枠が妥当である。

②1クラスの受講人数を30人までとする：体験学習プログラムの主体は、受講者である。演習はゲームではなく、受講者の相互作用の中から学ぶことができるように設定されたものなので、受講者同士が十分に話し合い、相互作用が生まれることが可能で、さらに一人のインストラクターが受講者を把握し介入できるサイズとしては30人が最大と考える。

③本コースに応募する段階で講座の内容を説明し、参加の心構えをもってもらう：体験学習では、学習者である受講者の主体性と自発性が学びの質を左右するともいえる。つまり受講者一人一人が、何かを与えられるのを待つのではなく、自ら学ぶという気持ちで参加することが、受講者同士の相互作用をも活発にする。そこで、市民を対象にした講座では異例のことながら、事前に、主体的にかかわることで学びが得られるタイプの講座であることを説明し、70%以上の出席、定められた課題の提出が修了の条件となることを伝え、その上で納得して受講手続きを踏んでもらう。

④一人のインストラクターが継続して一つのクラスを担当する：全体講義を除いて、体験学習プログラムのコマは、各クラス一人のインストラクターが継続して担当する。いわばクラス担任のような形である。1年間のプログラムは、24回という長丁場で、更に15回の体験学習プログラムを通

じて、受講生同士が様々な体験を共有していくことになる。こうした密度の濃い人間関係を体験していく時、例えば敵対や孤立といったネガティブな反応や危機的な状況がおこった場合でも、インストラクターが継続的にかかわっていることで、必要以上の負荷が受講生にかかることが防げる。より適切な介入や、担当する受講生の変化や成長を適切にフィードバックすることが可能となるのである。

⑤インストラクター同士の情報交換およびトレーニングの機会が充分にある：4人の異なるインストラクターが内容的には同じことを同時進行ですすめており、これは、それぞれのクラスで起こったことなどを一冊のノートに記録して情報交換している。これは各クラスの質をある程度揃えることと、同時にインストラクターにとっての間接的な相互学習の機会となっている。さらに、体験学習をすすめる上で、インストラクターは、ファシリテーターとも呼ばれ、学びを促進する役割を取る。これは概念学習として、一定の知識を伝えるという方法と異なり、「今、ここ」でおこっていることに対する感受性を磨き、例えば予測しない反応が生じた場合どう受け止めるのか、あるいは受け止められるのかといった体験学習促進者としての資質や体験が必要となってくる。本コースが始まるまでに2回の合宿研修を含む綿密な打ち合わせやシミュレーションの機会を持ち、また開始以後も内容に慣れ過ぎないように、後発で始まった中級や上級のインストラクターとローテートするなどの体制をとることが可能になっている。

⑥演習に必要な十分なスペースと可動式の机と椅子：これは案外見落とされがちなる要素であるが、例えば、始めに講義型の配置になっていた机を、演習を開始するにあたって手際よく動かしたり、片付けたりして必要な態勢がすみやかにとれることは、プログラムの流れを途切れさせず展開する上では大切なことである。

#### 4. 初級コースの現在までの問題点と課題

ヒューマンサービスコース初級コースは、1994年度に開講され、阪神大震災の影響で翌年は中止されたが、1996年及び1997年に開講され、この3